

武蔵野日曜聖書講筵

躍進！

――詩篇第114篇――

1977年1月2日

小池辰雄

出エジプト エホバの聖所 汝等は静まりて居るべし 地よ主のみまえにおののけ 主はいわ
を池にかわらせ 出現世の天国人 霊言の霊民 躍進また躍進 祈り

【詩篇114】

- 1 イスラエルの民エジプトをいで、
あだしことば ヤコブのいえ異言の民をはなれしとき、
- 2 ユダはエホバの聖所となり、
イスラエルはエホバの所領となれり。
- 3 海はこれを見てにげ、
ヨルダン後は後にしりぞぎ、
- 4 山は牡羊のごとくおどり、
小山はこひつじのごとく躍れり。
- 5 海よなんじ何とてにぐるや、
ヨルダンよなんじ何とて後にしりぞくや。
- 6 山よなにとて牡羊のごとくおどるや、
小山よなにとて小羊のごとく躍るや。
- 7 地よ主のみまえヤコブの神の前におののけ。
- 8 主はいわを池にからわせ、
石をいずみに変わらせたまえり。

●出エジプト

詩篇第114篇は、ダンテが『煉獄篇』で引用している有名ところで、彼はこの詩が好きだったと思います。そして、この短いたった8節の詩ですが、年頭に非常にふさわしいと思ったので、この詩篇を選んだ。

1 イスラエルの民エジプトをいで、

ヤコブのいえ異言の民をはなれしとき、
あだしことば

もちろんこれは出エジプトです。アブラハム、イサク、ヤコブと、それからずっとときまして、



ヨセフがエジプトに兄弟に売られて、ヨセフの族が三百年くらいエジプトで軟禁状態になって労働を強いられた。それを神さまはずっと見ておられて、

「イスラエルを救ってやろう、その苦しみから解放してやろう」

と。そこに選ばれたのがモーセです。出エジプト記3章は旧約でも極めて大事なところですよ。モーセにホレブの山で現れた神さまは霊火の中に、柴が燃えるけれども柴が燃え尽きないという霊的な火の中に現れて、「モーセよ、モーセよ」と。

「4…即ち神しばの中よりモーセよモーセよと彼を呼びたまひければ、我ここにありというに、…⁶我はなんじの父の神アブラハムの神イサクの神ヤコブの神なりと。……

イスラエル人は「歴史」という言葉は知りませんが、もう既に歴史的な神であるということがこういう宣言ではつきりと内容が出てくるわけです。

7 エホバ言いたまいけるは我まことにエジプトにおるわが民の苦患なやみを觀、また彼等がその驅使者おいつかうものの故をもて号さけぶところの声を聞けり。我かれらの憂苦うれいを知るなり。⁸われ降りてかれらをエジプト人の手より救ひだし、之を彼地より導きのぼりて善き広き地、乳と蜜との流るる地、すなわちカナン人ヘテ人アモリ人ベリジンヒビ人エブス人のおる処に至らしめんとす。

カナンの約束の地に連れて行くという、アブラハムに約束をされ、モーセに契約をされる神であります。そのようにして、モーセは神さまの命令で、

12 神いいたまいけるは、我かならず汝とともにあるべし。是はわが汝をつかわせる証しるしなり。汝民をエジプトより導きいだしたる時汝等この山にて神に事つかえん。

という。そこで14節に、

14 神モーセにいたまいけるは、我は有りて在る者なり。」（出エジプト記3・4
14）

と。この、

「我は有りて在る者なり」

を私は、

「我は有りて在らしむる者なり」

と読んでいます。神さまが有るということが、イスラエルの民を、また全人類を在らしめている。この神の恵みの意志によって、イスラエルの民がエジプトから出る、出される。

●エホバの聖所

「イスラエルの民エジプトをいで、

の「いでしとき」というのは「出る」という字が名詞になっている。直訳すると、「イスラ



エルの出エジプトのとき」ということです。

「出エジプト」

という。アブラハムが

「出ウル」

である。ウルを出た。アラビヤの北の方のチグリス・ユーフラテスの南方の地のウルを出た。アブラハムの出ウル、またモーセの出エジプト。

ヤコブのいへ異言の民をはなれしとき、

あだしことば

「イスラエルの民」「ヤコブのいへ」は別の言い方をしているが、内容は同じこと。ヤコブが即ちイスラエルという名前をいただいたのですから。ここに「異言」と書いてあるけれども、いわゆる異言ではない。別な他の言葉。別な具合にしゃべるところの民、即ちエジプトの民。そういつた民を離れたとき。ここには「離れる」という言葉は別でない。ただ「から」と、「異言の民からのとき」と書いてある。

² ユダはエホバの聖所となり、

イスラエルはエホバの所領となれり。

と。素晴らしい表現ですね。ユダ、イスラエル、これは十二支族の代表的な族ですから。やがて南方ユダの国、北方イスラエルの国ということになりますけれども。「ユダは、イスラエル民族は」ということ。

「ヤーヴェーの聖所」「彼の聖き所」

と書いてある。「聖所」というと、幕屋の聖所、至聖所。やがてそれが神殿宗教となると神殿の聖所になるわけですけども、ここでは、

「ユダという民が即ち聖所となった」

という言い方をしている。これは極めて注目すべき言葉です。また、

「イスラエルはエホバの所領となった」

と。その続べ治める所、所有する所となったと。即ち、両方とも「聖所」とか「所領」というような多少、物的な言葉ですけども。場所を表したりね。けれども、「ユダ」とか「イスラエル」とかいう民そのものが聖所とせられ、またエホバのものとされたという。これは詩篇16篇にも似たような言葉があつたと思いますが。

「⁵ エホバはわが嗣業^{ゆずり}またわが酒杯^{さかずき}にうくべき有^{もの}なり。なんじはわが所領をまもりたまわん。

ここは逆に、

「エホバが私の嗣業^{ゆずり}だ」

というような、凄いことを言ってます。即ち、

「汝はわがもの、我はなんじのもの」

と。神さまとの間柄がそういった非常に深いものになっている。また6節に、



6 準繩^{はかりなわ}はわがために楽しき地におちたり。宜^{うべ}われよき嗣業^{ゆずり}をえたるかな。(詩篇16・5・6)

「われよき嗣業^{ゆずり}をえたるかな」

という言い方が出てます。パウロがコリント書簡でも言っているように、即ち、

「汝らは神さまの、キリストの聖き宮である。聖所である」

という。ああいう表現は、パウロが旧約のこういうところから更に新約の角度からそれを受けとっているわけです。そういう、神さまとの関係がお互いに、

「我は汝のもの、汝は我がもの」

というような、そういう深い関係においてこの出エジプトの事態を力強く言っている。この1節、2節は非常にイスラエルの歴史において決定的なひとつの段階、それを非常に内面的に強く表現しているわけです。

●汝等は静まりて居るべし

3 海はこれを見てにげ

即ち、イスラエルの民が出エジプトをするときに、紅海はその勢いを見て――「海は見た」とただ書いてある――逃げてしまったと。即ち、二つに波が割れて、その中をイスラエルの民が通って行つたという。あの有名な「十戒」の映画にも出てくるようにして、イスラエルはもの凄い霊的な現象を通して救われた。しかしながら、エジプトの軍勢はそこに追いかけて来たところが、また波が戻って彼らはみんな水の下に溺れ死んでしまったというわけです。

出エジプト記14章13節に、

「¹³モーセ民にいいけるは汝ら懼^{おそ}るるなかれ、立ちてエホバが今日汝等のために為したまわんとする所の救いをみよ、汝らが今日見たるエジプト人をば汝らかさねて復^{また}これを見ること絶えてなかるべきなり。¹⁴エホバ汝等のために戦いたまわん。汝等は静まりて居るべし。」(出エジプト14・13・14)

「汝等は静まりて居るべし」

とある。これは詩篇46篇10節にも、

「¹⁰汝等しずまりて我の神たるをしれ。われはもろもろの国のうちに崇^{あが}められ、全地にあがめらるべし。」(詩篇46・10)

「汝等しずまりて我の神たるをしれ」

とありますが、それと相呼応するような言葉です。静まって祈りをもって、静かな祈り心でもって、じつと神さまのなすところを見ろと。それでモーセは、

「²¹モーセ手を海の上に伸べければエホバ終夜^{よもすがら}強き東風をもて海を退かしめ海を陸地^{くが}となしたまいて水遂^{ついで}に分かれたり。²²イスラエルの子孫海の中の乾^{かわ}



ける所を行くに水は彼等の右左に牆かきとなれり。²³エジプト人等パロの馬車、騎兵みなその後にしたがいて海の中に入る。²⁴暁あかつきにエホバ火と雲との柱の中よりエジプト人の軍勢を望みエジプト人の軍勢を悩まし、²⁵其車の輪を脱して行くに重くならしめたまいければエジプト人言う我儕われらイスラエルを離れて逃げん其はエホバかれらのためにエジプト人と戦えばなりと。²⁶時にエホバ、モーセに言たまいける汝の手を海の上に伸のべて水をエジプト人とその戦車と騎兵の上に流れ反らしめよと。²⁷モーセすなわち手を海の上に伸べけるに夜明におよびて海本の勢力いさおいにかえりたればエジプト人之人に逆いて逃げたりしがエホバ、エジプト人を海の中に擲なげちたまえり。²⁸即ち水流れ反りて戦車と騎兵を覆いイスラエルの後にしたがいて海にいりしパロの軍勢ことごとを悉く覆えり。一人も遺のこれる者あらざりき。」(出エジプト14・21〜28)

と。非常に劇的なことが書いてあるわけです。

これが即ち、いかにして「海はこれを見て逃げ」たかということ。

³海はこれを見てにげ、

ヨルダンには後にしりぞき、

という。

「ヨルダンは後にしりぞき」

というのはヨシユア記3章13節に、

「¹³全地の主エホバの櫃はこを昇かくところの祭司等の足のうらヨルダンの水の中に踏みとどまらばヨルダンの水上より流れくだる水きれとどまりて立ちてうずだかくならん。」(ヨシユア記3・13)

と。ヨルダンの水がそういうことになるという。そして、そのことが事実17節に、

「¹⁷即ちエホバの契約の櫃はこを昇かける祭司等ヨルダンの中の乾ける地に堅く立ちおりてイスラエル人みな乾ける地を涉りゆき、遂に民ことごとくヨルダンを済わたりつくせり。」(ヨシユア記3・17)

と。ヨルダン(河)を渡るときもそのような水が止まってしまった。「ヨルダンは後に退き」というのがそのことです。

●地よ主のみまえにおののけ

⁴山は牡羊のごとくおどり、

小山はこひつじのごとく躍れり。

「山」というのはシナイ山のこと。これは漢文の聖書を読むと、この「山」は「大山」と書いてある。大きな山。

「大山は牡羊の如く踊る」



と書いてある。それから、

「小山は子羊の如く踊る」

と書いてある。しかし、この「山」という字は複数なんです。その連峰のことをいうんでしょね。これはモーセの契約の徴として十戒が与えられた。その大事な事態を、

「山は牡羊のごとくおどり、小山はこひつじのごとく躍る」

という。彼らは非常にエホバの法を授かって喜んだ。けれども、民は必ずしもモーセの神の啓示をモーセの角度から受けとらない連中がいて、金の牛の像なんか造って偶像崇拜をしたから、彼らがいかに審判にあつたかということも出てましたね。

⁵海よなんじ何とてにぐるや

これは神さまの威光によって逃げた。

ヨルダンよなんじ何とて後にしりぞくや。

やはり、神さまの霊に圧倒された。あるいは、その命令に、神の神命に従った。キリストが嵐に、「静まれ！」と言えば、静まったというのと同じわけです。

⁶山よなにとて牡羊のごとくおどるや、

小山よなにとて小羊のごとく躍るや。

といって、畳みかけて同じことを語っている。この「なにとて云々」という日本語の訳し方は、もつと単純に――「なにとて」という字は別にありませんから――踊ったということと普通に訳しても構わないですが、しかし、この訳はなかなかいいと思います。

⁷地よ主のみまえヤコブの神の前におのけ。

「天よ聞け」

とか、

「地よ恐れよ」

とか、預言者がよく天地に向かつて語っていますが、この詩篇もやはりその角度です。大体、この詩篇というのは非常に預言者と通ずるものがしばしばあるわけです。

●主はいわを池にかかわらせ

⁸主はいわを池にかかわらせ、

石をいずみに変わらせたまえり。

と妙なことが書いてある。

「主はいわを池にかかわらせ」

というのは出エジプト記17章。これはもちろん荒野の旅の時のことですが。

「イスラエルの子孫の会衆エホバの命にしたがいて皆シンの曠野を立ち出で旅路をかさねてレビデムに幕張せしが民の飲む水あらざりき。²ここをもて民モーセと争いて言う我等に水をあたえて飲ましめよ。モーセかれらに言



いけるは汝ら何ぞ我とあらそうや何ぞエホバを試むるや。³ 彼処にて民水に
 渴き民モーセにむかいて¹ 眩^{くら}き言う汝などて我等をエジプトより導きいだして
 我等とわれらの子女^{こども}とわれらの家畜を渴きに死なしめんとするや。⁴ ここに
 於てモーセ、エホバに呼ばわり言う我この民に何をなすべきや彼らは殆ど我
 を石にて撃たんとするなり。⁵ エホバ、モーセに言いたまいけるは汝民の前
 に進み民の中の或る長老等を伴いかの汝が河を撃ちし杖を手に執りて^と 往けよ。
⁶ 視よ我そこにて汝の前にあたりてホレブの磐^{いわ}の上に立たん。汝磐を撃つべ
 し、然せば其^{そこ}より水出でん。民これを飲むべし。モーセすなわちイスラエル
 の長老等の前にてかくおこなえり。⁷ かくて彼その処の名をマッサと呼び又
 メリバと呼べり。こはイスラエルの子孫^{ひとびと}の争いしに由り又そのエホバはわれ
 らの中に在^{いま}すや否やと云いてエホバを試みしに由るなり。」(出エジプト17・1
 ～7)

とある。「マッサ、メリバ」というのは「争い、試み」という字ですが。そういうような奇
 跡的なことが起きたわけです。こういつたようなことは日蓮でも親鸞でもやった。

パウロが、

「この岩はキリストであつた」

なんてことを言つてましたね。コリント前書10章に、

「兄弟よ、我なんじらが之を知らぬを好まず。即ち我らの先祖はみな雲の下
 にあり、みな海をとおり、² みな雲と海とにてバプテスマを受けてモーセに
 つけり。³ 而して皆おなじく霊なる食物を食し、⁴ みな同じく霊なる飲物を飲
 めり。これ彼らに随^{したが}いし霊なる岩より飲みたるなり、その岩は即ちキリスト
 なりき。」(コリント前10・1～4)

という。これも出エジプトのことがその背景となつている。

⁸ 主はいわを池にからわせ、

石をいずみに変わらせたまえり。

そこが泉となり池となつたという。「池」と言おうが「泉」と言おうが、要するに水の^{ほとば}し
 の事態をいう。また、「岩」と言おうが「石」と言おうが同じことです。

●出現世の天人

これが詩篇114篇の歴史的な解釈であります。それで、我々は詩篇114篇を我々の問題とし
 てはいかにこれを読むかということです。

イスラエルの民がエジプトを出た。ヤコブの家が「^{あだしことば}異言の民」を離れた。出エジプトと
 いうこと。この新しい年を迎えて、私たちはもういつペン本当の霊的な出エジプトをしな
 くては。地上の相対的な我々のこの現実でありながら、我々はこの世の民ではない。



「私の国はこの世の国ではない」

とキリストが言われた。パウロも、

「わが国籍は天にあり」

と言った。出エジプト。地上にありながら実は「天国人」である。

「出現世」

現世にありながら現世を出でたるもの。移りゆく世にありながら、移ろわざるところの世にあるもの。即ち、

「我々は出現世の天国人である」

その「出」は永遠の生命を持つている。滅びない。

出現世をもうひとつ言いますと、その一体中心は何か。出現世と言うけれども、その中心は何か。

「出アダム」

生まれつきのアダムを乗り越えたもの。

「第二のアダム、キリストに属するもの」

です。第二のアダム、キリストに属するものは出アダム、生まれつきの自己をたち出でたるもの。

「われ生く。しかし、もはや我にあらず。キリストわがうちにありて生き給うなり」

というのがこの「出アダム」の現実であります。

新年というけれども、また新年も古くなる。しかしながら、

「新年おめでとう」

というこの「新」の字は新しい「カイノス」です。「ネオス」でなくて、このカイノスの新しき。古くなっても決して古くならない新しき。質的な新しき。質的な新しきというのは、これは出エジプトをしなければ、出アダムをしなければ出てこない。

●霊言の霊民

我々がこの新年を迎えて、いよいよその自覚を新しくする。即ち、出現世である。出アダムである。これがこの、

「イスラエルの民エジプトを出でしとき」

という歴史的なものを更に霊的に受けとったことになる。

「ヤコブのいえ異言の民を離れしとき」

という。今度は、地上の何語でもない。日本語でもない。ドイツ語もなければ英語でもなければ、ヘブライ語でもギリシア語でもない。その根源の言葉、

「霊言の霊民」



となる。「靈民」なんていう言葉はおかしいけれども、靈的な民であるから靈言を語る。聖書は靈言の本ですからね。日本語であろうと、ギリシア語であろうと、ヘブライ語であろうと、その奥の、これはいつも私が言っている

「根源語の響き」

を受けとらなくては。キリストはアラム語を語られたけれども、キリストのアラム語でも問題ではない。キリストは地上ではアラム語を語られたでしょうけれども、そのもうひとつ奥の、即ち一番根源の言葉（ウル・ヴォルト）です。この根源語の――それは神の言葉、靈言――その民となっている。

「儀文は殺し靈は活かす」

というが、聖書の言葉を本当に活かすのはこの御霊の言です。

「イスラエルの民エジプトを出で、ヤコブの家異言の民を離れしとき」

というのは、我々にとってはそのような脱あるいは

「出アダム、出現世の民となり、根源の言葉を語る、聞く民」

となる。そのときに、ユダは、イスラエルは、

「我々は神の聖所となり神の所領となる。本当に天国人で現にある」

わけです。活ける神殿である。

「私は三日で建てるぞ」

と。こんな百何十年もかかったような神殿がぶっ壊れても、「私は三日で建てる」とキリストは言われた。あの「三日で建てる」というのは即ち、

「三日目に自分は活ける神殿として甦よみがえるぞ」

ということですよ。

「無教会」「無神殿」というけれども、自分が本当の教会に、本当の神殿にならなければ、ただ無教会だの無神殿だのと言ったって、しょうがないですよ。それこそ空しい。

私たちはそういう神殿で、宮である。聖霊の宮である。どこにおいてもそこを即ち神殿としてしまうわけです。だから、その点で、

「ユダはエホバの聖所となり、イスラエルはエホバの所領となった」

というのは非常に愉快な言葉だ。これを新約の光で読むというと、そういうことになる。

「われは汝のもの、汝はわがもの」

と、キリストに向かってこれが言えるわけです。これは正に恩寵の現実です。

●躍進また躍進

ヨルダンも山もみんな喜び踊る。歓喜する。本当の歓びが、新しき年を迎えての歓びは、この現実に入らなければ本当の歓びにならない。だから、踊る宗教なんてのがあっても、あれはある意味において自然の現象なんだ。踊るために踊ったら、それは困るけれどもね。



動物も植物も、また山も川も海も、大いに讃美し踊るといふようなことは詩篇の終りの方に出てきます。正に我々人間が本当に神の飲びの器とされて躍動してやまない。だから私は今日は

「躍進」

と題した。そのようなことになる、出エジプト、出アダム、出現世すると、本当の躍進また躍進となる。この一年をその力をもって躍進して行こうと。何ものも恐れることはない。渴いても、どっかい泉が湧いてくる。

「石かと思つたら、それはキリストだった。そこから泉が湧いていた」

と、パウロが言つたとおりです。

我々は、新年にあたつて、このような神の活ける聖所となり、所領となり、嗣業ゆずりとなつて、そしてまた、出アダム、出現世をしながら、本当の根源の言葉を聞きながら、直ちに靈歌的現象の飲びの歌とされながら、躍進また躍進をして行こうと。

そして、モーセの弟子のヨシユアがヨルダンを渡るときに、モーセの出エジプトと同じようなことをヨシユアがして渡つて行つた。そのように、我々はこの神の靈的な恩寵のもとにいよいよ躍進また躍進していく。また、せざるを得ない。これが年頭の所感――所感なんていつたつて、いわゆる所感ではないけれども――年頭の実感であります。そのようにして、皆さんと進んで行く。

こういうわけで、毎日が我々にとつては力なんです、正直。私はもう語りながらほとんどそういう状態に入っているわけです。どうぞ、どんな現実がきても、この神は一切の行き詰まったところで――もうイスラエルの民はやつつけられようとしたが、どっかい水を渡つて行つた――絶すると、逆に驚くべきことが開かれていく。

「^せ為んかた尽くれども絶対^せに望みを失わず、倒さるれども滅びず」

とパウロが言つた。それでなくて、何の信ぞや、何の現うつぞやと、こういうわけであります。だから、詩篇114篇をダンテが好きだったのも、その意味においてよく分かるわけです。

●祈り

アブラハムをとらえて、行く所を知らずして、曠野より曠野へと、緑地より緑地へと、導き給うた神さま。また、エジプトの苦難の中に独り置かれたところのモーセをつかまえて、シナイ半島において彼に現れ、

「このイスラエルの民の苦しみを私は見た。これを助けてやる」

と。遂に出エジプトの驚くべき御業をモーセを通して為し給うた神さま。まことにあなたの歴史は奇くしき道を辿らしめられております。

この出エジプトがイスラエル人にとつて掛け替えのない恩寵であり、また、出バビロニアが罪からの解放として、赦しとして、またそれ以上の事態を展開なし給うたところの、



救いのおん神さま。遂に出エジプトも、出バビロニアも、キリストを通してこれを全き内容と為し給うたところの神さま。私たちはこの地上の生涯、たかが百年であります。この地上にありながら、出現世、出アダムをなし、真に天国人として、最も力強い歩き方を、逆説的にこの地上において成さしめ給うことを感謝いたします。

実にこのようにして、どのような運命がこようと、環境となろうとも、苦難にあえばあうほど、行き詰まれば行き詰まるほど、逆にあなたの力が来、また光が臨み、生命が溢れるという驚くべき事態を実証なさしめたまわんことを願います。

この年に何が待っているか知りません。しかしながら、あなたにあつては、どのようなことが起きても、いよいよもつて、ペテロも告白しているとおり、

「聖霊汝の上に留まるがゆえに喜べ、喜べ」

と、躍動また躍動して、躍進また躍進して参ります。どうぞ、そのことを知らざる人たちにいかにもして、その悲しみまた苦しみ悩みにおいて、ここに本当の道ありと、ここに力あり、ここに光ありと、示さしめたまわんことを願います。

一切の人間的な思想ではありません。あなたのこの驚くべき現実をいかにもして、キリストに直結した人たちは証していきましたが、我々も――カトリックでもプロテスタントでもありません――キリスト直結の事態をいよいよ証しせしめ給わんことを願います。数ではありません。一人びとりの質が問題です。どうぞそのようにして、今日はわずかの人しか来ませんでしたが、しかし、ここに永遠の一瞬をつかんだ人たちは必ずそのことをもつて進むことを感謝いたします。

どうぞ、これを聞きそなた者たちに、また録音を通してでも何でも、これを伝えさしめたまわんことを願います。

今日は特に、あなたの伝道の器I君がここに来て一緒に讚美し、また望みを共にし得たことを心から感謝いたします。また、画道にいそしんでいるT君や、うちのNやまたその他の新しい方々も実に不思議なこの二日を迎えました。どうぞ、それぞれの道においてのつびきならない事態を示し、そして、「ここに道あり」と。

「我は道なり、生命なり、真理なり」

との、キリストは決して観念でないことを身をもつて受けとっていくことができますように、いよいよおん導きくだらんことを切に願います。

この日本はさまざまの問題が山積してますが、決して経済問題ではありません。一番大事な問題は心の問題。このことにまた僕も力を尽くして戦っていきたいと思います。

一切は聖名のため、また、聖名にあつて祝福してください。また聖名が讚美せられますように。尽くしませんが、心からの感謝と讚美と希望、兄弟姉妹たちのそれぞれの全身に溢れるところのそれともに聖名により捧げ奉る。アーメン。

